

第8回世界考古学会議に参加して

横山 操*

1. はじめに

第8回世界考古学会議（The Eighth World Archaeological Congress：通称 WAC8）が、2016年8月26日から9月2日にかけて、同志社大学今出川キャンパス（京都市）を主会場として開催された¹⁾。なお、世界考古学会議の第6代会長は溝口孝司氏（写真1）、第8回世界考古学会議京都大会の実行委員会委員長は、都出比呂志氏であった（写真2）。

世界考古学会議（WAC）は、原則4年に一度開催される国際会議である。開催年である今年は、世界考古学会議の創立30周年であると同時に、濱田耕作博士によって日本に考古学の黎明がもたらされ丁度100年の節目でもある。また、東アジアで初めて開催する WAC として記念すべき大会として、関係者の想いも深く、学会発表件数は1600件、参加国数は80カ国、150を超えるセッション

が開かれ、これまで以上に大規模な開催となった。会議は、学術成果の報告の場としてだけではなく、考古学術史について今日までの道のりを振り返るとともに、今後、考古学がなしうる・なすべき仕事について改めて問いなおす対話の場としても位置付けられ、公開講演会を含む様々な企画が催された。また、京都市内の博物館（京都国立博物館、京都文化博物館、京都大学総合博物館）では、サテライトイベントとして WAC8 の開催にちなんだ特別企画展やイベントが、また、建仁寺両足院はじめ市内のギャラリー各所では“アートと考古学”をテーマにした展示やワークショップが催さ



写真1 世界考古学会議・第6代会長 溝口孝司氏の挨拶



写真2 第8回世界考古学会議京都大会 実行委員会委員長 都出比呂志氏（左）と 学術顧問 泉拓良氏（右）

* 京都大学農学研究科 京都大学総合博物館



写真3 京都大学総合博物館サテライトイベントでの受付風景（学生ボランティアスタッフ。全国からの考古学専攻の学生ボランティアは総勢180名におよぶ）

れ、京都を舞台として、世界の考古学の現状、そして日本・京都における考古学、それぞれの地域での文化遺産と市民生活との関係、また、災害・防災に関する話題提供など、様々な形の“考古学”が表現され情報提供された（写真3）。

ここでは、WACの概要とともに、WAC8において報告された木質科学・木材保存に関連する話題について紹介したい。

2. 世界考古学会議の歩み

世界考古学会議は、先・原史学国際学会（International Union of Prehistoric and Protohistoric Science）から分離・独立する形でスタートした学会である。設立の背景や経緯は、WAC提唱者である Peter Ucko 氏の論考²⁾、都出比呂志氏の手記³⁾、また最近では富井眞氏のノート⁴⁾に詳しいため、ここでの詳細は割愛するが、WACは設立当初より、途上国や先住民などのマイノリティ、経済や言語などの社会的障壁によって、“現代社会では声を聞き取りにくくなりがちの人々の主張に耳を傾ける努力”³⁾を重ねることにより普遍性の獲得に努めているNGO組織である。“考古資料”というモノを対象とする研究が、それぞれの時代・地域における様々な制約を受けつつ行う営みであることを自覚し、そして、考古資料に基づく過去の研究そのものと同様、あるいはそれ以上に、考古研究を取り巻く現代の様相・利害関係についても注意を払う姿勢が、特筆すべきWACの性格である。

この姿勢に関連して付記すべきは、WACにおいて最初の倫理規約（First Code of Ethics）を制定した後、改訂作業や協定（Accord）制定に向けて回を重ねられて議論されていることである。考古資料の取り扱いに関する倫理的取り扱いについては、すでに100年以上前に、ロンドン大学のFlinders Petrie氏（後述）が、“考古学の道徳”の必要性について言及し、先鞭をつけていることが知られているが^{5, 6)}、WACにおいても、常に見直され、議論を共有するオープンな作業が継続されている。

このことを背景とし、WACでは、最新の研究調査成果だけではなく、互いの研究背景を共有し、現代社会における研究意義を問うテーマが多く見受けられるのが特徴となっている。WAC会議は、“考古学は短期的な視点で社会を見るのではなく、過去を探索することによって長期的な将来展望をもたらすものであり、それぞれが生きる今の時代に深く関わる”ことへの強い意志、考古学者としての自らが担うべき歴史的・社会的役割の自覚を明示する姿勢を、再確認する場であるともいえよう。そのため、今大会では、日本が近年見舞われた震災を課題として、文化財レスキューや、福島文化財の現状と課題（FUKUSHIMAからの声：被災文化遺産の最前線）、災害の痕跡と復興に関わる研究報告が積極的に取り込まれたほか、“災害・防災と考古学”シンポジウムは、地域の人々を対象に一般に公開された。

3. セッションの概要

WAC8では、大きく15のセッションに分類された。それぞれのセッション・テーマのキーワードを列举すると、考古学と開発、考古学と政策、ポスト植民地時代、考古学の倫理、グローバル化する世界における比較考古学、地域研究と考古学、考古学における教育、文化遺産と博物館、考古学の未来、科学と考古学、宗教と信仰、相互交流と考古学、災害の考古学、アートと考古学、戦争・紛争と考古学、となる¹⁾。

これらのテーマ、キーワードを一見するだけでも、世界考古学会議はそれぞれのコミュニティを背景とする環境・経済・政治・社会問題に直接・間接に大きく関わる考古学研究であること、また、

そのことを意識的・意欲的に取り上げていることが読み取れよう。これらのセッションは、それぞれ複数のテーマのシンポジウム・報告会で構成され、その総数は軽く100を超えた。

例えば、木質科学と関わりが深いと考えられるセッション T10 科学と考古学（セッションリーダー Robin Torrence 氏）を例に挙げると、23の分科会（シンポジウムとワークショップ）から構成された。それぞれの分科会は、動物考古学と社会考古学、土器と文化財科学、生物考古学、地理考古学、デジタル考古学、シミュレーション・ビッグデータによるサイバー考古学、金属考古学、酸素同位体比年輪考古学、古人骨研究、植物考古学、古病理学、考古遺伝学、気候変動、ロボットを利用した水中考古学、であり、他の関連学会と比較しても、調査・分析手法や研究対象（時代・地域）は多岐にわたっており、既存の考古学の枠にとらわれない考古学会議であるともいえる。

科学と考古学セッションの目的は、“科学的な概念に基づく、最先端技術を用いた世界各地の事例研究・考古学者の取り組みが提示されること”に加え、“考古学における諸問題に対する近年の科学的アプローチ、技術の有用性と妥当性についての検討、科学的な考古学への制約についての考察”，そして、“データの持続可能性、蓄積されたデータや施設の公開、学術データの標準化や厳密性の維持という点からの考古科学分野の諸問題への取り組み”を示すことであった⁴⁾。

また、上述の各分科会に分類されないテーマ約50件については、ポスター発表として開催期間中掲示され、ディスカッションが行われた。

口頭およびポスター発表全体を通じて、木質科学・木材保存に直接関連する研究報告は、15件であり、年輪年代学、酸素同位体比による年代測定、樹種識別、保存科学の分野のほか、木製遺物を対象とした考古学研究、古植生研究がこれに当たる。

酸素同位体比年輪考古学（コーディネーター：総合地球環境学研究所・中塚武氏）の分科会では、東アジアの各地域における出土木製品を用いたセルロースにおける酸素同位体比に基づく年輪解析によって、過去4000年のマスタークロノロジーが作成されつつあることが示され（例えば、Takeshi Nakatsuka：酸素同位体比年輪考古学の背景、理

論、今後）、高精度年代測定法の確立による編年の構築による、あらたな考古学の可能性が示された。一方で、木製遺物の製作技術から弥生時代の集団の解明を図るといった、典型的な考古学手法による研究報告（Khosuke Tsurugi：木材資源の獲得戦略の変遷：弥生時代および古墳時代の鋤に着目して）や、遺跡出土木製品が同一個体から作成されたかどうかを木材の年輪解析から精査した研究報告（Yoko Ura & Hasuharu Hoshino：年輪年代学的手法を用いた木製遺物の同一性の検討）など、従来から提議されていた考古学上の課題に対し、科学的手法により意欲的に挑む研究報告が認められた。また、菌類の保存処理（Rie Endo et al.：羽毛ケラチンで保存処理した新石器時代の薬用きのこの同定）や出土木材と木の実の加工と消費（Taro Kataoka and Nobuhiko Kamijyo：堅果類と木材利用から見た縄文時代後期・晩期の社会基盤）など、木質科学の調査手法を応用した研究報告が認められた。

なお、筆者は、本セッションにおいて Misao YOKOYAMA et al.：イメージング分光による京都大学総合博物館所蔵コプト織物の分析および Misao YOKOYAMA et al.：X線CTによる鼓胴の樹種識別の報告を行った。

4. WAC8と濱田耕作博士

冒頭に、2016年は、濱田耕作博士によって日本に考古学の黎明がもたらされて100年の節目であることを述べたが、濱田耕作博士（1881-1938、のちに京都大学総長）により京都帝国大学に日本で初めて考古学講座が開設されたのは、1916年の4月のことである。濱田耕作博士の前人未到の偉業を偲び、京都の名刹・鹿ヶ谷にある法然院には、7月の青稜忌をはじめ墓前を訪れる研究者は今日も少なくない（写真4）。

濱田耕作氏は、イギリス・フランス・イタリアなどへ留学し考古学の研究手法を学ぶことにより欧米の考古学研究を日本に導入し、我が国の考古学研究の礎を築きあげた。殊に、“科学的考古学の父”と知られるロンドン大学の William Matthew Flinders Petrie 氏（1853-1942）に師事して多大な影響を受け、この縁により、エジプト出土資料が、京都大学に寄贈されている⁶⁻¹⁰⁾。その



写真4 法然院にある濱田耕作博士の墓

コレクション数は約1500点にのぼり、古代エジプト文明の黎明期である先王朝時代から滅亡期にあたるローマ時代にわたる各時代の遺物は、世界的に見ても大変貴重なものが多く含まれる。

列強各国が調査隊を送ってエジプト考古調査を行っていた当時、美術的に価値が高いと思われるものを対象に収集することが主であった。しかし、生活に関わるあらゆる遺物を集成して編年を構築し、遺物研究を通じて社会のあり方や変遷を考える、今日の考古学的研究の基礎を築いたのが、Flinders Petrie 氏その人である。そして、濱田耕作氏は、彼の哲学をもとに、第一次世界大戦を挟み、機を見て数回に渡ってイギリスから託された様々なエジプト出土遺物を、人間の文化や社会を考えるための学術資料として、日本での考古学研究と教育に注いだ¹¹⁾。

日本の考古学術史上100年の節目である WAC 8 参加の機会により、生きる時代・地域の制約を受けつつ行わざるを得ない研究の位置付けを再確認しえたと同時に、人に出会い、資料に巡り、研究の歩みを誘われることについて、そして、古い資料群を守り学ぶだけでなく、そこからの新たな

道のりを導く覚悟について、考えを深めることができた。

そして、木質科学、とくに基礎的な物性研究手法とその知見は、資料保存と活用のため、材質評価や劣化診断、収蔵庫の環境評価とその改善に非常に有益であり、遺物そのものを研究対象とする考古学においても必須である。筆者は、様々な履歴を持ち、木質材料を含む多様な天然素材で構成される博物館資料群が、続く100年後も学術資料としての価値を損ねぬよう、これからもできる限り努めたいと考えている。このほか、WAC 8 については、考古学研究63巻3号(2016)にも特集が組まれているので参照されたい。

引用文献

- 1) The Eight World Archaeological Congress, Book of Abstracts, WAC Japan, 2016.
- 2) Peter Ucko : Achademic Freedom and Apartheid, The Story of the World Archaeological Congress, 1987.
- 3) 都出比呂志 : 世界考古学会議参加の記, 考古学研究, 33 (3), 1-9 (1986).
- 4) 富井眞 : 世界考古学会議第7回ヨルダン大会に参加して思うこと, 古代文化, 65 (2), 112-119 (2013).
- 5) W. M. Flinders Petrie : Methods and Aims in Archaeology, London, Macmillan, 1904.
- 6) 濱田耕作 : 通論考古学, 大燈閣, 大正11年刊(大正15年第5刷).
- 7) 京都大学総合博物館 : 考古学資料目録エジプト出土資料, 2016.
- 8) 京都大学文学部博物館 : 京都大学文学部博物館, 1987.
- 9) Proceedings of International Symposium on "From Petrie to Hamada Egyptian Antiquities of Kyoto University", Kyoto University, 2016.
- 10) 京都大学文学研究科考古学研究室 京都大学総合博物館編 : 京都大学総合博物館開館10周年記念企画展図録, 埃及考古 ペトリーと濱田が京大エジプト資料に託した夢, アクティブ KEI, 2011.
- 11) 濱田青稜 : 考古学入門, 創元社, 昭和16年刊(昭和23年第14刷).

(2017.1.5 受付)